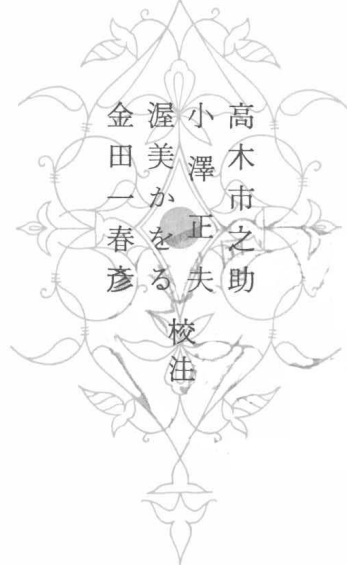


日本古典文學大系 32

平家物語 上



岩波書店刊行

昭和 34 年 2 月 5 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 1 月 30 日 第 18 刷 発行

定価 2100 円

校注者 たかぎいちのすけ 高木市之助 おざわまさお 小澤正夫
あつみ 渥美かをる きんたいちはるひこ 金田一春彦



発行者 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布 1-385
白井倉之助

発行所 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

凡例	三
解 說	三
目 錄	六
卷 第 一	八
卷 第 二	一四
卷 第 三	二〇
卷 第 四	二六
卷 第 五	三二
卷 第 六	三八
補 注	四三

校異補記	……	四五
付 函	……	四七

解 説

一

平家物語はどのように読んだらいいか。この問題は、広くは、一般に古典文学を今日の吾々はどのように読むべきかという、いかにも普遍妥当なひろびろとした問題に連なり、狭くは、日本の、中世の、語り物の、しかも特殊な、もつといえは各異本によって多少とも性格を異にしているそれぞれをどのように読み分けるべきかという、個別的な問題に分け入らなくてはならない。尤もこういう事情は一般に「文学」そのものが本質として最初から背負って来ているどうにもならぬことでもあるが、しかし又、それは平家物語という文学に特に顕著な性格でもある。随ってこの問題は日本古典文学大系に収められた各作品に或る程度共通するにも係らず、他の作品に関しては必ずしもその解説で一々ことわるには及ばないが、ただ平家物語に関する限り、吾々解説者はそれをよけて通ることは出来ない。それは、二・三・四の各章に亘って解説することの、前提であると同時に結論でもあるであろう。

一般に日本の古典文学はそれが古典文学である限りに於て、日本民族に対し、或る今日の価値を持つ筈である。このことは自明の理であるが、考えてみれば多少の問題はある。たとえば、当の文学が成立当時から今日の言語用字で書かれた場合には、一往問題は無いが、それが古典と呼ばれる以上、言語用字に於て、今日のそれらとの間に、或る程度の異同を予想するのが当然であり、この予想はそのまま、この文学の今日的価値を考える場合の、何等かの障害となるこ

とを予想させることになるであろう。しかし吾々が今ここで考えようとしていることは、古典文学に於けるこのような一般的な問題ではない。古典文学と呼ばれる範疇の作品の中には、成立当時必ずしも書かれ読まれたとは限らないものがある。例えば風土記や記紀に収められているいわゆる歌謡や延喜式に採録されている祝詞のようなものには、その成立事情が、民衆又は常民と呼ばれる人々によるものであろうと、或は職業的な専門家によるものであろうと、とにかく文字に媒介されることなく、口誦歌唱によってうたい又は語られたものであることを確かめ得るものが少くない(本大系古代歌謡集・古事記祝詞等参照)。随って吾々は、これらの歌謡や語り物を理解するためには、単に所収の文献を読むことだけではなく、そうした観点から離れて、直接にその成立の慣行の場について追究しなくてはならない。従来古代歌謡の研究などが、こうした場との関係を重視せず、後代の純粋に書かれ読まれた文学に対すると同じ態度で進められて来たことは、厳しく反省されなければならないのであって、吾々はこの種の作品に対して、今後強力にこの方法を押し進めなくてはならないであろう(本大系古代歌謡集解説参照)。しかしながらこのことは、これら古代の、いわば書かれ読まれなかった作品が、今日に於て古典文学として読まれるのを拒否していることではない。ないどころか、却って、このようにこれらの作品のそうした直接の場を明らかにすることによって、吾々は本来読まれなかった作品の、今日的に読む途を、正しく拓いて行かなくてはならないのである。例えば、記紀の物語の中に挿入されている歌謡の中に吾々は、酒ほがひ・国見・歌垣等種々成立の場を推定発見することが出来、これらの場をその歌謡へ反映させることによって、その歌謡を一層適確に理解することが出来ることにまちがいはない。随ってこのような推定なり発見なりは、それらの場に無理解に盲目的に読むという方法を是正し前進させることになるであろう。しかしながら、それでは一体これらの歌謡を、文字によって読むこと以外に、どのようにして今日の吾々は、なまで受容することが出来るであろうか。この関係は、前掲もろもろの場についてもあてはまることであって、たとえば、歌垣についてどんなに多くの文献や民

俗を蒐集して、そこから当時の風習を知り得たところで、吾々はそこにそれらの知識を一つの生活として、なまに表現する途はないのである。酒ほがひや国見にしても同断であって、今日の吾々が現実に催す宴会や、試みる登山によって、古代の習俗としての酒ほがひや国見を、なまな経験にすりかえられない限り、それらは知識以外の表現ではなく、随ってそれらに扶けられてでも、吾々はうたわれた歌謡を、文字で読むこと以外には受容する途はないことになる。

そこで問題は、このようにしてうたわれた歌謡を文字で読んでしまうことによって、それらの作品の今日的な古典的生命を失うことになるかどうかということに移って行くのだが、管見に随えば、吾々はこのような場合に於ても古典を今日に生かし続けることを断念するには及ばない。なぜなら、成立当時単にうたわれ語られるばかりで読まれなかったらしい、これらの歌謡もその造型力を或る程度に書かれ読まれる文学にまで持ち越すことが不可能ではないからである。この辺の理論が納得されるためには、多少煩瑣な解説を必要とするので、ここでは割愛する外はないが、ごく要約的且つ常識的に言つて、ひろく文芸と呼ばれるものを作り出す創造的経験の根幹をなすところの造型力とでも仮称され得る或る能力は、文芸作品にまでうち出された当の形がうたわれたり、聴かれたりすることから、書かれたり読まれたりすることへ移行することによって、それほど変質したり衰弱したりするものではないと言える。随つて前述古代歌謡の場合でも、これらの作品の本質を明らかにするためには、前に述べたようにその成立生起のためのもろもろの場を追及し、これらの場を作品へ反映させることによって、その理解を助ける必要はあるけれども、そのようにして理解された歌謡をなまの形として受容するためには、本来はうたわれて聞いた筈でも、それを文字で書かれて読むものへ持ち越すことは或る程度可能であり、その可能の程度は、高度の近代文学が作家から読者へ受容されるために必然に起る避けがたい諸制約を上まわるほどのものではないと言えよう。この理論は古代歌謡の場合のように、うたわれる習慣しきたりが完全に滅びてしまわないで、半ば保存されている古典的作品例えば近松の浄瑠璃などによつても立証されなくはない。今

日吾々は近松の作品を、文楽座その他に於て書き下ろされた当時と、同様ではなくとも類似の方法で受容することは不可能ではない。この場合吾々は一方に上演される劇(人間俳優による歌舞伎劇も含めて)と他方に本大系の近松浄瑠璃集等によって読まれる古典文学と両方の方法を併せ持つことが出来るのだが、このような受容の方法を見くらべて言い得ることは、少くとも近松の本来丸本によつた浄瑠璃が読むという世界にも十分に持ち越されるということであろう(実は歪曲された上演以上にといいたいところだが、それは別問題を含むから、ここでは遠慮することにして)。

以上、平家物語のよそごとを並べて来たようであるが、それは要するに、日本のすぐれた古典に於ては、本来読むために作られなかつた諸作品でも、それを読むことによつて今日的な生命を持たせ得ることを、比較的分り易い例証によつて説明したまでであつて、吾々はこの、言つてみれば自明に近い理論を、性質のいささかこみ入つた平家物語の場合にあてはめて、本大系に於ける古典文学としての本物語は、どのように読んだらいいかということの説明し、合せて解説二以下各項の序説とするわけである。

平家物語は解説二の「作者と成立事情」の項で説かれているように、要するに中世の世界から中世人によつて生み出された、もつとも中世的な文学なのである。という意味は、それが文学であるための要件として、そこに造型創造されているものは或る人間像乃至人間によつて構成される或る社会像でなくてはならない。換言すれば単に観念的抽象的に思弁される中世ではなくて、具象的現実に生動する中世がそこになくなくてはならないのである。同じく中世の世界から中世人によつて生産された幾多の戦記や説教書が、平家物語のようになすぐれた中世文学であり得なかつた根本の理由は、それらの書が戦争や信教のための教科書ではあつても、そこに中世的な人間像や社会像が創造、造型されなかつたことに帰因するであろう。随つて平家物語を読むことは、先ず以て読者がこのような人間像や社会像を受容することなく

てはならない。随つて又、解説二の「主題」の項で採り上げられている戦い、仏教乃至恋愛、風流等にしても、それらの主題は觀念的乃至教養的な性格を明らかにするための主題ではなくて、飽くまでもそこに活躍し推移するなまの人間や社会を創造するためのそれらでなくてはならないのである。このことは当然、そこに形成されている中世的人間なり社会なりが引き続き近代的人間なり社会なりを生み出す関係にあることを必要とするのであって、このような関係にあればこそ、この古典的創造の世界に今日の意味が生れて来るのである。

三に於て平家物語の言語を解説する場合も事情は全く同様である。例えば語法の条で、亀井孝氏が、近代日本語の古代日本語に対する特色として、論理的な明晰を主とする文体の確立をあげている線に沿つて、平家物語に、源氏物語・枕草子などの前代文学に比べて、語法の上で論理的な関係が明確に言いあらわされるようになったことを指摘し、一方又現代人の感覚で読むと論理的に不徹底な点が少くないことを明らかにしているが、こうした語法が諸人物の会話の中にある場合は言うまでもなく、それによつてその人物の中世的な姿態を肉づけることになるし、そうでなく、地の文にある場合にしても作中の人間像(作者もまた人間像の例外ではない)なり社会像なりの中世的風貌を形成する上に決して無関係ではあり得ないであろう。又例えば語彙の条で木曾義仲の言葉の中に、方言が使われていることは、そこで説明されているように、必ずしも義仲が現実で使用した、信濃の木曾という特定の地方の方言ではなく、京都周辺の言葉が使用されていたに過ぎなかつたとしても、それによつてこの武骨な田舎武士の人間像が彷彿されたとすれば、吾々はそこにも語彙による文学的創造といったことを見逃すことは出来ないであろう。尤も本物語に於ける言語的特徴としてそこに解説される大小の事実の中には、個々に切りはなした場合にそれほど直接明瞭に、物語中の中世的人間像なり同じ社会像なりの造型形成に影響するらしくないものも無いではないが、このような事例にしてもそれらが相よつて、或る全体的な言語として平家物語を支えることは事実であつて、この関係はやはり、そこに創造されている人間像や社

画像に無関係ではあり得ないであろう。要するに、三で考慮されている諸項目に亘る理解はこの古典文学を今日的意義に於てなまの中世的人間像乃至社会像として読みとるには必須の基礎条件であつて、しかもこの理解が深くこまかに行き届くほどこの読みもまたそれだけ行き届くという関係にあるものといえるであろう。

四の平曲解説が、この物語を古典文学として、その今日的意味に於て読みとる上の不可欠の基礎知識でなくてはならない関係もまた三の場合と同様である。唯このような関係が二に解説されているように、平家物語の成立事情と不可分離の特質を成すだけに、それはまた平家物語をどう読んだらいいかという、本節の問題に対しても、一般古典文学に対する場合とは異なる特殊の関係にあるものとしなくてはならない。

例えば四に於て主として平曲の立場から、諸本の系統的成立事情が解説されるということは、二に於て平家物語の成立事情が、このように諸本の異同そのものに亘ることなく、主として作者の性格や物語の内容の主題に即して解説されたことと、何の矛盾もないばかりか、両者はむしろこのように並行的にそれぞれの専門的立場に立って一往別々に扱われることにより、両者の立場の混淆による読者の理解の混乱が防がれなくてはならないと考えられる。しかしながら解説のこのような方法によって、もし説者が、諸本の分立やそれぞれの性格の相異を、単に平曲による事由に帰し、この物語そのものの古典文学的把握という、一番重要な、そして本大系の存在理由でもある目標から引き離し、或は少くとも遠ざけようとするようなことがあるとすれば、それはゆゆしい誤解であつて、校注者達がこのような構想によって、それぞれの専門的知識を持ち寄つたことの大半の意味を讀者のために失うことになることを虞れなくてはならない。

この場合、平曲として語られた平家物語は、冒頭に掲げた他の古典文学の例でいえば、歌われた古代歌謡に照応する。そして古代歌謡に於て、前述したように、もろもろの歌謡が、成立の当初に於て読まれる文学としてではなく、歌垣・国見などの場に於て生れたのであり、そしてそのような場を発見し、一層それを追究することが、これらの歌謡の文学

的受容(それがこれらの古典に対する唯一のなまの受容でしかないところの)を深めるための必須の前提であるとすれば、ちょうどそのように、平家物語に於て、それが成立し成長する際に、読まれる文学としてでなく、平曲として生れ、流行したのであり、平家物語の場合は、これと並行して或る程度記録なり、或はそれ以上の文学として、読まれたことも予想されるが、そうした単に文献として読まれ、或る程度鑑賞もされたであろうこの物語は、今日まで引きつがれた今日の古典としては却って傍系的二義的意義をしか持ち得ないであろう。この意味に於て延慶本乃至源平盛衰記本は本大系の底本に値しないのである。そしてそのような平曲の場を発見し、一層明らかにし、そして諸本の分立・派生・継承などを平曲との関係に於て追究することは、やはり平家物語を今日の古典文学としてなまで受容するための必須の前提でなければならぬであろう。ただ平家物語の場合は古代歌謡のそれと異なり、誠にかすかながらも今日まだ平曲が保存され、少数の検校その他の語り手によって、それを聴くことが出来るのであって、この点は、前例浄瑠璃の場合が照応するであろう。そして近松の浄瑠璃などの場合に、これも前述したように、本来の上演の方法によるのと、本大系近松浄瑠璃集などによる読書の方法によるのと、両方をくらべて、上演された浄瑠璃の古典的本質がけっこう読む方法へ持ち越されるように、吾々はこの文化財的に貴重な平曲を聴くことと、本大系本の場合のように、校注された本文を読むこととを比べることによって、前者の本質が後者へ持ち越され得ることを確かめることが出来るのである。尤も前述のように、平曲の上の諸知識を追究することによって却つてこの物語の文学的読みから遠ざかろうとする読者の誤解に對しては、二・四の執筆に當つても、その都度十分に警戒されているし、更に下巻の解説に於て諸本の性格について、二・四を綜合して解説されるであろうことは、四五頁にことわっている通りであるが、一往あらかじめここに序説的にことわつて置く次第である。

なお読者の誤解のないように、念のためにここで一言して置きたいことは、以上のように平家物語に對して、すぐれ

た古典的存在としての今日的意味を読みとることを読者にしようよう(徳憑)していることは、必ずしもその他の読みを拒むことではないということである。もちろん日本古典文学大系が所収の作品を日本の代表的古典として採択した以上、それらの作品が、前述して来たような意味で読者にまみえることは何よりも望ましいことにはちがいないけれども、それだからといって読者がそれとは別に、それぞれの好みに従って、例えばこの物語を史料として中世に於けるもろもろの歴史的関連を明らかにしようとし、或はこれを資料として中世に於ける幾多の言語的諸現象を調べ、或は平曲を含む諸民俗芸能の動きを捉えようとする等々の方向に立ち向うことを妨げようとするものではない。このことは、意識するとしないうちに係らず平家物語自体の作因として、多少の程度に肯定されなくてはならないことであり、随って又過去の研究史上にもそれらを目的として採り上げられて来たことであり、更に言えば、各章に亘る解説を執筆する場合にも、それらの方向は或る程度予想されている筈であって、本章で平家物語の古典的意義が強調されるあまり、その他の意義が過少に評価されることのないよう吾々は留意しなくてはなるまい。

二

一 作者と成立事情

平家物語の製作年代と執筆事情とに関する諸種の資料の中で、一番古く且つ具体的に物語っているのは徒然草第二二六段にみえる次の記述である。

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の誉ありけるが、樂府の御論義の番にめされて、七徳の舞をふたつ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、学問をすてて遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸あ

るものをば下部までも召しおきて、不便にせさせ給(ひ)ければ、この信濃(の)入道を扶持し給(ひ)けり。この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教(へ)て語らせけり。さて、山門のことを、ことにゆゝしく書けり。九郎判官の事はくはしく知(り)て書(き)のせたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くのことどもをしるしもらせり。武士の事・弓馬のわざは、生仏、東國の者にて、武士に問(ひ)聞(き)て書かせけり。かの生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり。(本大系30所収 徒然草 二七一—二七二頁)

この記述は平家物語の本質を考えさせるいろいろな資料を吾々に提供しているが、物語の成立事情とその製作者については後鳥羽院の時代に慈鎮和尚(大僧正慈円ともいふ)の世話になっていた行長入道というものが平家物語を作つて、生仏という東国生れの盲人に語らせたというのがその骨子である。第二の資料はこの物語の内部、すなわち巻五「物怪之沙汰」の条(三四二頁以下)にある源氏滅亡以後、藤原氏が鎌倉に迎えられたこと(承久二)を暗示する記事であるが、この記事は八坂本に存在しないのだから、その有無によつて平家の原本の成立期を論じるにはよほど慎重な態度で臨まなければなるまい。第三の資料は藤原道家の日記「玉蘂」の承久二年四月二十日の条にみえる平頼盛の子の光盛が「多く平家を持」つていたのを道家が借りたという記録である。これは松井驥氏が雑誌「文学」の昭和九年七月号で初めて紹介したが、後藤丹治氏や永積安明氏も早くから知つておられたようである。「玉蘂」で「平家」と呼ぶものが平家物語を指すならば、この物語は承久の乱以前に書かれていたことになり、徒然草で「後鳥羽院の御時」とする成立説は強化されるわけである。しかし、これは高橋貞一氏が「平家物語諸本の研究」で疑つておられるように、「平家」とは平家に関する記録のようにも考えられ、ことに、多く平家を持つていたという記述を平家物語をたくさん持っていたと解釈するのは無理ではなからうか。なお、徒然草以外の文献に平家物語の作者として伝えられる人物は十数人にも達し、後藤丹治氏の「戦記物語の研究」にはこれらの人物が列挙されているが、中にはこの物語の数多い異本のどれかと関係のある

ものがあるかもしれない。中で葉室時長・桜町成範（成範は九二頁注一一参照）などは比較的注意を要する人物であろう。さて、徒然草にいう信濃前司行長が平家物語卷三「行隆之沙汰」二六〇頁参照、卷六「祇園女御」四二三頁参照にみえる中山行隆の子の前下野守行長であろうということをはじめ、行隆や生仏の出自や経歴について、故山田孝雄氏などが試みている考証的研究はもちろん必要である。しかし、前掲の徒然草の記事は平家物語についてのもっと本質的な文学的性格を暗示しているようだから、ここでも成立と作者の問題を、この物語の本質を一そう明らかにするための手段として考えることにしよう。

文献の語るところによれば、この物語は源平の争乱がしずまった鎌倉時代の初期に最初の形態を具えたが、その形成には天台座主の慈鎮和尚と、少しは学問もあったが俗世間で志をえなかつた古代末期の一小官吏、それから東国出身で武士の事情にも通じていた琵琶法師とが関係していた。そして、この三人の出会いの場所は、「さて、山門のことをことにゆゆしく書けり」と徒然草もいっているように、この物語中に延暦寺に関する記事が大そう多いこと、さらにこの物語を語り物にした平曲が当時の仏教音楽であつた声明しょうみやうの系統を引くものであることなどの理由によって、比叡山であつたと考えられる。そのころ、比叡山は貴族国家の公認宗教の本山としての機能を果たすとともに、強力な経済的基盤の上に立つて多数の信徒の利益を代表し、時には実力行使にも及んで公家武家の新旧勢力に対抗し、山自体が一種の中世的秩序を作り上げていたことは平家物語にも具体的に写し出されている。平家物語の作者が「学問をすてて遁世した」のはこの山であつたらしいのだが、その遁世は長明や西行の場合とはまったく趣の違つたものであつたらう。それはこの山自身が一つの中世的勢力として、激動する時代に対処するために外部に対して或る程度の障壁を設けてはいたらう。しかし、その地理的位置はこの山をして時局に超然たることを許さず、また、寺院というものの性質上、他の社会での脱落者の最後の避難所となつたであらう。そういえば、行長も生仏もやはり他の社会からの転入者であつたが、「一

芸あるもの」であつたがゆえに、天台座主に拾われたかれら二人に、最初から横川よしかわか黒谷の奥に引きこもり、修行三昧にふけることなんか到底許されなかつたのではなからうか。外部の勢力とはいつどんなトラブルが起るか分らない、内部には日本全国の雑多な分子を抱えこんでいる——ということになれば、比叡山こそは混沌たる当時の日本の縮図、あるいはもっとも典型的な中世的世界であつたとさえいえないこともあるまい。そして、時代は平家が壇の浦で滅亡した一八五寿永四年からおよそ三十年のちである。戦争による物的心的のいたでを受けた人々は、行長・生仏を初めとして、この山にはことに多く生き残つていたろう。平家物語がこういう環境から生まれたと考えることは、徒然草以下の諸文献によつて推し測られるこの物語の成立事情との間に矛盾を来たさなればかりでなく、平家物語こそは中世的世界から中世人によつて生み出された、もっとも中世的な文学だということになるのである。

二 主 題

この物語に語られた主題をひと言でいえば、変革期の社会の動きそのものということにならう。その変革は都における少数の人々の間での権力の交代という性質のものではなく、非常に長い年月をかけて日本の隅々にまで蓄積された新しい力を原動力として行われた、社会機構の根本的な変革であつた。そして、そのような変革期に生をうけた日本人の諸体験を、比叡山という、ある意味では当時の社会の縮図といえる地域に住んでいたらしい作者（もっとも、かれはかつては武士の本場である東国の国司も勤めたし、都では動乱のまきざえを食つて惨憺たる苦勞も重ねたではあるう）が、大体において正しく捕捉表現したものがこの物語なのである。

次にこの物語中で特に重要と思われる個々の主題のいくつかを取り上げてみよう。

第一に重要な主題は戦いである。ここでは一往戦いということばで一括して取り扱うが、小さなものは個人的な武力

の行使に始まり、氏族間の闘争、地方的暴動から国を挙げての内乱に至るまで、あらゆる種類の武力的闘争がこの物語には描かれている。これらの中には指導者らしいものもっていない民衆の蜂起のようなものもあるが、この種のもの描写にかえて民衆の思想感情が生生きと捕えられていることがある。さらにこの時代の戦いの原動力であり、軍記物語の「主人」である武士については、合戦の技術を初め、物的・心的・社会的なあらゆる生態が観察され描写されている。

戦いに対するこのように積極的な関心と表裏一体をなすのが、当時の人々の戦争への恐怖心である。もともと、あるいは権力に対し、あるいは天災地変に対し、あるいは目に見えない怪異に対する恐怖、または社会的不安は平安末期の京都を中心とする国民の間にかなり蔓延していたものとみえる。戦争に対する恐怖心は、平氏の全盛時代には事を起せば失敗するぞという思想で現われていたから、権力に対する恐怖の変形であるともいえよう。それが、最後に平氏の領袖たちが数珠つなぎにされて京都市中を引き廻されるのを見せつけられたのだから、その時市民たちがこの戦争から受けた衝撃は吾々の想像に余りあるところである。

第二に、この物語が成立の当初から仏教と関係が深いことは前述の通りであるが、仏教は主題としても重要な役割を演じている。当時の仏教または寺院というものは広汎な内容と複雑な組織をもって強く広い影響を社会に与えていた。で、この物語に現われる仏教もまた多種多様の姿を呈している。兼好法師によって「ことにゆゆしく書けり」と批評された比叡山を初め、東大寺・興福寺・三井寺などの旧仏教に属する諸寺院はその政治的勢力によって時代を推進するものとして描かれているが、宗教的にはそれぞれの寺院の権威が強調され、仏罰神罰の恐ろしさも重要な主題としてしばしば物語られている。熊野は政治的勢力として南都北嶺と同様の性格をもっていたが、平氏との結びつきに特殊なものがあり、またこの物語の終りの方になると純粋に宗教的な機能が表面に押し出されて来る。高野山も平氏に厚く信仰さ